

■海外便り

タイ・バンコクからの便り

豊田 祐輔*

学外研究先：Environmental Research Institute, Chulalongkorn University (ERIC)

学外研究期間：2022年4月～2023年3月

科学研究費（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（A））をいただくこととなり、本学の研究専念制度を利用し2022年4月より1年間にわたってチュラロンコン大学環境研究所（ERIC〔エリック〕：Environmental Research Institute, Chulalongkorn University）に所属しています。

研究タイトルは「防災文化の転換による持続的な防災学習を通じた包括的地域防災力の向上に関する研究」としており、タイ北部ナーン県内の地域コミュニティやバンコクの大学生を主な対象として調査を進めています。日本と同様にタイも災害多発国で、2011年の大洪水は50年の1度の規模となり、日系企業の工場団地が浸水するなど日本のサプライチェーンにも影響が出たことから記憶にある方もいらっしゃると思います。ナーン県も洪水多発地域ですが、2011年大洪水が始まった県でもあります。

今回お世話になっているチュラロンコン大学はタイ最高峰の大学であり、その中でもERICは環境問題や気候変動に関する研究を進めている研究機関です。こちらにお世話になる際の正式文書には「Researcher」と書かれていたのですが、ERICでの受入は「Visiting Professor」となるなど齟齬はあるのですが、本学での客員研究員にあたるため「(Visiting) Researcher」を正式名称として履歴書等には示しています。また、バンコクは国連のアジア太平洋地域のハブである国連アジア太平洋経済社会委員会（United Nations ESCAP：The Economic and Social Commission for Asia and the Pacific）やアジア災害防止センター（ADPC：Asian Disaster Preparedness Center）が位置するなど、アジアや東南アジアの防災活動の拠点とも言える都市であり、防災研究を進めるにあたって最適であると考えています。

地域情報研究所の海外便りは本稿が2本目となりますが、先例と同様に研究の話から始め、現地の（研究）生活の話をしたいと思います。

* 立命館大学政策科学部 准教授



Figure 1 割り当てていただいた研究室前の様子（肩書きは「Visiting Professor」）

現地での研究内容ですが、大きく分けて3つの課題に分かれており滞在中は第1課題と第2課題に取り組んでいます。第1課題はナーン県の中でもERICの支援によりコミュニティ・ベースの洪水対策が進んでおり、世界保健機関（WHO：World Health Organization）のセーフ・コミュニティに認定された地域コミュニティAを対象として、ゲームを使って地域防災知を収集することを目的としました。このゲーム（ゲームA）は、参加者が2011年大洪水の前・中・後に実施した活動を1つずつカードに書いていく手法で、競争的要素と挑戦的要素、そして協働的要素を含むものです。競争的要素としては、各参加者が何枚カードを書いたのかを表として示すことで組み込みました。一方、挑戦的要素は記入したカードの内容を日本の防災専門家である筆者が納得できたかどうかを「まるばつゲーム」形式でフィードバックしていくというものです。途中から「まる」をもらうべく場が盛り上がり、またこちらの質問に対してカードを記入した参加者以外からも更なる説明が加えられる（参与観察の限りでは、私から「まる」のフィードバックを得るべく参加者が力を合わせていました）など協働的要素の発現も確認できました。その上で、フォーカス・グループ・ディスカッションとの比較を通じて、開発したゲームの有用性を示しました。

そして第2課題では、ゲームAで収集した防災地域知を学習できる別のゲームBを開発し、別の地域コミュニティBや大学生などを対象に実施することで、短期的な学習効果を確認しました。このゲームBも構成は似ており、洪水前・中・後に自身が与えられた役割（市長、コミュニティ・リーダー、コミュニティ役員、コミュニティ・メンバー）に基づいてどのような活動をするかをカードに記入してもらうものです。その後、地域コミュニティAで実践されていた特長的な考慮事項を踏まえているかどうか確認し、点数化してい

きます。さらに本ゲームを再度実施することで、1回目と2回目の点数を比較し、短期学習効果とともに参加者が真剣に取り組んだことが確認できました。本研究はまだ分析中ですが、1回目のゲーム実施においては洪水を経験している地域コミュニティ、事前にコミュニティ・ベースによる洪水対策について学んだ大学生、その他の学生の順に点数が低くなるなど、現実の経験・知識の量が反映された結果となりました。その上で、参加者が記入した防災活動の内容を比較するなどして、どのような知識を持ち合わせているのか、その相違は何かなどを検討し、今後の防災教育へ提案することを予定しています。また、ゲームBを地域コミュニティBで実施したことで、今後、ERICが地域コミュニティAにおいて実施した防災活動を地域コミュニティBでも実施することになりました。

来年度は、地域コミュニティBにおいて防災活動実施前と後の比較調査をすることで、特に防災文化の転換や包括的地域防災力の向上程度を評価し、第3研究課題の研究をまとめます。本稿執筆時点では、調査票の設計を進めている段階です。以上を通じて、モデルコミュニティからの特長的な地域防災知の収集、その地域防災知学習手法の開発・実践、さらにその防災学習の波及効果としての他の防災活動実施による防災文化の転換による包括的地域防災力の向上という一連の関与方策の評価を行い、今後のコミュニティ防災政策への実践的な知見を提示できればと思っています。



Figure 2 地域コミュニティAでのゲームA実践時の様子
(研究者はチュラロンコン大学のカラーであるピンクの服で統一している)

続いてタイでの生活の話ですが、まず研究面については国内最高峰の国立大学ということもあると思いますが、リサーチ・アシスタントなどの人材が豊富で羨ましいと常に感じています。私がお世話になっているERICにもナーン県に事務所があり、そこに複数のリサーチ・アシスタントを有し、調査準備や地元関連機関や住民との調整も対応してもらえます。また、私の受入研究員も現在2名のリサーチ・アシスタントをもち、研究活動を進めています。これらのリサーチ・アシスタントはチュラロンコン大学の大学生・大学院生の場合もありますが、他大学の大学院生や卒業生も含まれます。大学院生が少ない私立大

学の文系学部に所属する筆者には、本当に羨ましい限りです。

一方、チュラロンコン大学に限らずタイの有名大学も大学ランキングに神経を尖らせており、論文も Q1 に位置する学会誌での掲載が求められるなど若手研究者が厳しい環境に置かれています。こちらに在籍していると研究実施と論文執筆という研究者の第一の仕事の重要性を痛感するのですが、一方で教育や社会貢献など大学の教員として求められることについても手を抜かないように自戒する次第です。また、チュラロンコン大学などいくつかの大学では研究の収益化事業が進められているようです。ERIC の気候変動グループにおいても、会社を設立し、企業活動の炭素排出量の算出を行うサービスを有料で提供する活動を計画するなど、自分自身で研究資金を生み出す努力が求められています。

研究以外の生活面については、これまでバンコクには何十回と訪問し、過去にも半年間滞在した経験があること、また日本人が多く日本食レストランも多くあることから、それほど困ることはありません。一方、タイの冬など空気が乾燥し風があまり吹かない日は PM2.5 の警報が発出され一部の学校が休校になるなど、自動車や工場の排気ガスなどの大気汚染の問題は深刻です。自動車の話となりますが、バンコク（のみですが）は電気自動車が日本よりも普及している様子で、充電設備の整備も急速に進んでいるようです。また、街中で見かける電気自動車のほとんどが中国車となり、20 年近くタイに通っていますが、日本車の割合が小さくなっていることを実感します。またチュラロンコン大学内にもレンタル自転車や電動キックボードがあり、アプリ（QR コード）で支払い等ができるなど、環境対策やデジタル化が進んでいることが伺えます（Figure 3）。ただ、やはり車の利用が多く、ガソリン車が大半であることから、大気汚染は深刻なままのようです。



Figure 3 チュラロンコン大学構内のレンタル自転車・キックボード

ついでにバイクの話をするのですが、これまで以上に台数が増えている印象です。その大き

な要因が Grab などの宅配サービスです。食事時にはレストランには Grab などのジャケットを着た人が多数待っており、街中でも配達バイクが縦横無尽に走っています。スーパーではアプリから欲しいものを選ぶと、Grab の運転手が代わりに購入し自宅まで届けてくれるサービスもあります。コロナ・ウイルスもあり、バンコクで在宅勤務もしていたので、部屋から全く出なくても仕事・生活ができる程度まで便利かつ低価格です。ここまで宅配サービスが流行っているのはコロナ・ウイルスの影響と所得格差が大きいのだと思います。1 回の配達で得られる収入は多くて数十円程度で、バイクの燃料費やかかる時間を考えると低収入でも配達する人がいて経済が成り立っているのを感じます。

最後は研究していく上でも最も心配であったコロナ・ウイルスの話ですが、日本と同じような状況であると思います。大抵のタイ人は本稿執筆時点で屋内・屋外を問わずマスクをしており、今はなくなりましたが検温機付きの入りロゲート（測定体温が 37.5 度以上あるとゲートが開かないものですが、Figure 4 のように人が多かたり面倒であったりすれば、ゲートの左側から直接中へ入れます）やソーシャル・ディスタンスが取れる（前後）距離でエスカレーターに乗ることを促す信号表示までありました。観光が経済の重要な支えとなっているので国外旅行者の受け入れは早かったのですが、タイ人のコロナ・ウイルスに対する衛生感覚は多くの日本人の実践と似ており、タイに入国した際も違和感がありませんでした。



Figure 4 検温機付きの入りロゲート（左）；ソーシャル・ディスタンスが取れる距離でエスカレーターに乗ることを促す信号表示（右）

もうすぐ帰国となりますが（本稿が出る際にはすでに帰国しています）、教育や大学行政などをこなしながら、この1年間で得られたネットワークを活かしてタイでの研究内容と日本での研究内容を有機的に結びつけて研究活動を継続していきたいと思います。

2023年2月6日
豊田祐輔